

命なりけり

丹羽文

命なりけり

丹羽文雄

朝日新聞社刊

命なりけり

定価 六五〇円

昭和四〇年一月三〇日第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 浜名二正

印刷所 精興社

発行所 朝日新聞社

東京 名古屋
大阪 北九州

© 丹羽文雄 一九六五年

命なりけり

目次

妻の在り方
失格者
人間診断
昔の仲間
通じないことは
帰国
夜のおそい理由
秋
変った家風
四年目
式から旅へ
涙
予感
砂の音
落葉拾い

165 157 148 130 121 110 86 80 70 62 48 36 25 15 7

かえらざる中傷	175
梶とその周辺	188
青葉の下	198
弱点	207
夜	216
結婚式場	223
債権者会議	238
社長排斥	243
解散式のあと	268
鈴虫	277
追討ち	296
秋の空	311
夜の話し	325
親の心持	345
二つの哀願	351

装幀・挿絵、竹谷富士雄

命
な
り
け
り

落葉拾い

老女が三人、林の中にはいった。武蔵野のおもかげの残る林である。松の梢が、ほどよく空をおおっていた。中には、ひと抱えもある幹がある。空がおおわれているので、雑草は伸びかねて、すでに黄色になっていた。松笠が落ちていた。三人の老女の白髪が光るようで、ひときわあざやかであった。老女は林の中を歩くことがたのしいらしく、ゆっくり林の中央に進んだ。三人のあとから背の高い、若い女がビクニック用の籐のバスケットを下げてつづいた。自然のままの黒いゆたかな髪を、清潔にたばねている。白の大柄の大島がすりに、白鷺を染め出した臙脂の帯が、林の中では妖しく、なまめかしい。そのうしろから運転手が、ダンボールの中箱と、赤い毛氈をまるめたのを抱えてつづいた。無言の進行がしばらくつづいた。

「すばらしい土地ですね」

白髪のひとりがいった。男の子のように刈上げた、小柄の老女である。ゆうきの茶無地のきものに、小紋の茶の羽織をきている。つやつやとした、白い、可愛い顔立である。

「十四、五年にもなりますかしら。義理で、むりやり買わされたんですよ。山林ということだね。見ずに買いました」

「いまなら大へんな財産ですわ」

「ほしいといってくるひともありますが、べつにお金の必要もないので、すててあります。おかげで、松の木も切られずに……」

と、明治時代の束髪を思いきって小さくした束髪の老女が答えた。老女は、あたりの松をながめやった。切られずにすんでいる松の命を、よろこんでやる眼差である。藍大島のコまかい casuri で、ついの羽織だった。白い肌がつやつやとしている。

「何坪ありますか」

べつのひとりが訊いた。

「千坪をすこし欠けますかしら」

「たのしみですね、将来ますます値が上って……」

束髪の老女が、問うた。

「私の将来ですか」

答えがなかった。が、白髪を一束にたばね、小さい髭をつけた老女の肩が、すこし笑ったようであった。

「当年とって八十歳ですよ」

「私たちもおなじ年齢ですわ」

三人の老女の笑い声が、林の中の静寂に吸いこまれた。三人は、ある女学校の第一期生であった。そのときの卒業生で残っているのは、この三人になっている。束髪の老女が、あたりをたしかめるように見まわしてから、

「鈴鹿さん」

「はい、おばさま」

若い女が、束髪の老女に近付いた。

毛氈が敷かれた。でこぼこしているのは、仕方がない。が、かえって風情があるだろう。ダンボールの箱と、バスケットがおかれた。

「私は、車の方でお待ちしてます」と、運転手がいった。

「ご苦労さま。ながくは待たせませんが、退屈だったら、車の中で眠って下さい。風もなく、小春日のいいお天気ですわ」と、束髪が答えた。

刈上げの老女と、髪を一束にした老女は、自分の好きな方向へ林の中を歩いていった。

一束の老女は、蚊がすりのきものをきているが、いずれ亡夫のかたみであろう。それにゆうきの、淡い、古代紫の羽織だった。老女は小さい、黒いハンドバッグから手帖を出すと、手帖についている小さい鉛筆で、何かを書きこんだ。あたりの風景を見て、しばらく沈思するふうであった。書きとめると、顔をあげ、手帖をひらいたままで歩き出す。胸にうかぶことばを、あたりの景色に託して書きとめているようだった。はるか遠くに、バスが走っていた。音はきこえない。農家が点在する。農家は、武蔵野のおもかげの中にとけこんでいた。このあたりには、耕運機も走らない。昔からの風致地区であった。

鈴鹿は、ダンボールの箱からビニールにつつまれた、小さいスコップがとり出されるのを見ていた。小さい葉籬があらわれた。

「さっそく間に合わせの炬を切らねばなりません」

正座した、束髪（むくみ）の魚住泰子がいった。鈴鹿はあたりを見まわした。いたるところに松の根がはっていた。土を掘れば、松の

根にぶつかるだろう。

「素焼の風炉なら、持ちはこびにも便利だったでしょう」

「それでは、面白くないですよ。真形、丸釜、筒釜、富士釜にも、今日は用がないのです」

そして、鈴鹿の顔をまっすぐ見た。一重のようにみえる二重まぶたを鈴鹿はしていた。眉尻がすこしさがっている。ひろい額は、いくらかおでこ気味だが、聡明さと明朗さを感じさせる。魚住に否定されて、ひっこみのつかないのが微笑となった。アルカイック・スマイルである。ギリシャ先住民族の彫刻にみかける、笑うと口尻が上る。すこし唇が厚い。こまかくて、きれいな歯並びだった。口尻の上に、小さいえくぼが出た。唇の動きに、あふれるような若さがあった。ひろい肩幅も、いかつくなくて、背丈にふさわしかった。鈴鹿の顔は、どこか能面の若い女に似ていた。高貴な、うら若い美しさを感じさせる。能面は、喜怒哀楽のいずれの感情の変化にも応じられるように考案された中間的表情である。魚住泰子は姪の顔をみていると、能面のもつ中間的表情を感じる。位星でもつけたら、もっとよく似合うだろう。

あたりの老女は、たがいにじゃまにならない程度に間隔をもっていた。髪を一束にした老女は、メモでもとるようにしきりと小さい手帖に書きこんだ。書きこんでいるのは、俳句だった。鶴岡礼子（つるがかりこ）といえば、俳句の世界では名を知られていた。かの女は、殉情のひとといわれた。情熱のひとといわれた。三代から俳句をつくり、代表的な俳句雑誌の同人だった。その中



の重鎮だったが、鶴岡礼子には野心がなかった。句を作ること
で生きているふうであった。若い同人は、かの女の高齢におど
ろいた。そして、その俳句の若々しさにまたおどろいた。蚊が
すりに古代紫の濃い羽織をきているが、生理的に枯れた中にも
どこか昔の妖艶さをとどめていた。かの女の句は、枯淡になら
なかった。五十年來、おなじ調子である。恋をうたい、生活を
句にしてみた。俳人は多くのことを知る必要はない、流行に左
右される必要もない、ひとつのものを知れば、その最上の用
い方を発見し、みがきをかければよいと信じているようであっ
た。鈴鹿は、伯母から鶴岡礼子の恋の巡礼をきかされること
があった。伯母のところに毎月寄贈される俳句雑誌の中で、鶴岡
礼子の俳句をよんだ。尊敬こそすれ、そんな過去のあったこと
を、すこしもさげすむ心にはならなかった。

「あのひとにとっては、俳句をつくるのが命なのです。俳句
は、あのひとを救いました」と、魚住泰子がいった。「男から
男にわたりあるいたけれど、俳句をつくることを捨てなかつ
た。といって、俳句でえらいひとになろうという野心もなか
った」

「ちょうどおばさまが、お茶ひと筋に生きてきたのと、おなじ
人生ですね」

と、鈴鹿がいった。

「そう、私は、一人子を失ってから、ずうっと今日までお茶だ
けに生きてきました」

「そして、江見のおばさまには、謠があります。それも、おな
じ理屈ですね」

「あの方は、ときどき舞台上に立ちますよ。ちっとも年齢を感じさせない。おみごとですよ」

そのとき、江見延江は松のあいだをお能の舞台と錯覚しているらしく、お面をかぶり、鬘をつけ、長絹で、鬘扇でももっているようにかまえていた。刈上げた白髪が、冬の陽にかがいた。江見延江は講いながら、ゆっくり動いた。風致地区の松林の現実には、わすられていた。鈴鹿はその近くまで、落葉を拾いにきていた。松笠を二つ三つ拾い、動くのをやめて、江見延江をながめやった。謡がきこえた。永年きたえた声である。女を感じさせない、落着いた声であった。

「……見仏聞法の数々、順逆の縁はいやましに、日夜朝暮にここならず、九夏三伏の夏たけて、秋来にけりと驚かす……」よくわからなかったが、鈴鹿はそんなふうに聞いた。

野外では、炬を切り、竹を組んで釣り釜をかけるのだが、風致地区の松林の中では、そんな風流はいらない。松の根のじまにならないうちで土を掘り、そこらの小石をあつめ、即席の炬をつくった。釣り釜のかわりに、菓籠のせられた。

「松笠は火力がつよいから、燃えつけば、しめたものです」

「野趣満点ですわ」

と、鈴鹿が笑った。かまどの中から、白くて、濃い煙がのぼった。

「今日は、あなたの送別会ですよ」

鈴鹿が思いがけないという顔をした。

「おふたりには、まだ話してありません。お茶をのみながら、

発表します。先輩のことばには、いろいろと参考になることがあります」といつてから、魚住泰子が思い出したように苦笑した。「あなたは二十五歳、私たちは八十歳。あんまりひらきがあります。だけど、女の生き方には流行はありません。私たちは普通のひとにくらべると、ゆうに二人分は生きてます。ことに鶴岡礼子さんのお話は、傾聴に値するでしょう。虚心となつて聞くですよ」

「はい」

江見延江が、半分は舞台のつもりで、次第にこちらに近づいて来た。とおくの松のあいだを歩いていった鶴岡礼子も、こちらに向つて歩いていった。手帖はひらいたままである。

「運転手は何て思ってるでしょうね」

「ものずきと、呆れているでしょう。でも、私たちはこんなことをして余生をたのしんでいるのではありませんよ。そんないかげんなものなら、とても八十までは生きられません。三人とも、自分の道に打ちこんでいます」

「何かひとつ打ちこむものを持っているひとは、ことに女のひとは、仕合わせですわ」

「あなたはこれからです。近日結婚するのです。私たちのように生きられるかどうか、これからきまるのです」

ふたりの老女が毛氈に近付いた。魚住泰子が、茶籠をとり出した。

「何を謡っておいででしたか」

と、魚住が訊いた。

「ちょっと、東北を……」

江見延江が、毛氈に上った。

「あらためて聴かせていただきますわ」

何ということなしに江見延江が、鈴鹿に笑いかけた。三人の老女の顔は、いづれもきれいにみがきあげられている。素顔はつやつやとして、白い。鈴鹿の若さだけではかなわないものがあった。

「この子に、今日の思い出に、何か書いてやって下さい」

と、魚住が鶴岡礼子にいった。

「あいにく今日は、何も準備してないですよ」

「いいえ、後日で結構ですわ。この子も、いよいよお嫁入りします」

アルカイック・スマイルをみせて、鈴鹿は目を伏せた。いつときふたりの老女の眼差が、鈴鹿の上におかれた。終着駅にたどりついた古機関車が、これから出発しようとする列車をながめているようであった。

「それは、おめでとうございます」と、江見延江が平凡にいった。

鶴岡礼子もおなじことをいったが、つづけて、

「おいくつにおなりですか、鈴鹿さん？」

「二十五になりました」

代って魚住泰子が、答えた。

「それだけのごきりょうで、お家もよいのに、どうしておそくなったのでしょうね」

「いろいろと家庭の事情がございまして」

魚住泰子は鈴鹿のすべてをあずかっているような口をきい

た。そのあいだに、魚住は携帯用の茶籠から、一玩具のような茶道具一式を取り出した。バスケットから、蓋付の菓子器を出した。主菓子は、後の雛である。銘菓のひとつだが、中に紅白にふたつならんだものがあり、何となく内裏雛を連想させ、春の雛に対して秋の雛であり、後の雛といわれた。が、何のことはない蒸羊羹の切出しである。

「深草の少将ではございませんが、百夜も通うほどの熱心なひとがあらわれて、この子もつい相手の情熱にほだされ、結婚する気になりました。長谷部家では、この子の母親が亡くなりましてから、冷遇だったのです。だれもこの子の結婚をいそいではくれなかったのです。ばやばやしている内に、二十五にもなりました」

「でも、そんなに思われて結ばれるのなら、お仕合わせね」

鈴鹿の全身にあふれている若々しさを感じると、鶴岡礼子は自分の昔が思い出されるらしかった。おぼえのあることである。さっそく、句が浮んだ。鶴岡礼子はふとこころにしまった手帖をとり出して、書きとめた。

「この子も、心中ひそかに思いをよせていたひとがあったのですよ」

「あら、おばさま、そんなこと……」

「だれにも知られず、嫁いでいくとなると、あなただって淋しいでしょう。私は、ちゃんと知ってましたよ。口に出すのは、今日がはじめてですが、あなたの心の奥の秘密は私があずかりましょう」

と、魚住泰子がまじめな顔でいった。

「そういう秘密を知りながら、いままでだまっていたのは、泰子さん、あなたの責任ですよ」

抗議しないでいられたかったのは、鶴岡礼子だった。抗議されるだろう、と魚住にはわかっていた。

「世の中は、とかく皮肉にできてます。好きなひとには、奥さまがおありだった」

「そんなことは、いまだき大して障碍になりませんよ」

「いまでも、昔ですか」

「はい、昔もいまでも。この私が体験しました。何ですか、鈴鹿さん、そんな気の弱いことで……？」

「いじめてやって下さいよ。たしなめてやって下さいよ。私はこの子が結婚にふみきったと知ったとき、うんといじめてやりたくまりました。どういう気なんですかね。可愛さあまって憎さ百倍ですか。ちょっとやさそつでは、この子は泣きそうになり。いじめがいがあるでしょう」

魚住の口調は、さばさばとしていた。

「鈴鹿さん、身長は？」

と、鶴岡が訊いた。

「一六四センチでございます」

そんな身長を申し訳ないというふうには、鈴鹿は肩をすぼめた。

「一六四センチ、どうもメートルはぴんと来ませんね」

「五尺四寸です」

「おみごと」

と、江見延江がいった。

「体重は、十五貫」

「いやですわ、おばさま」

茶筌とおしもすんで、魚住泰子はお茶をたてる段階にはいた。生まれた月が早いので、鶴岡礼子が正客しょうきやくだった。鶴岡は、「お先きに」と一礼して、菓子器を両手でとっていただき、「お菓子を頂戴します」といった。懐紙を出して、膝前ひざまえにおいた。くろもじを懐紙の上におき、菓子器の蓋をとる。作法どおりの所作である。茶室にいるかのような態度であった。が、いかにも作法にしたがっているという窮屈な感じがなく、そうするのがいちばん自然な所作であった。

「この子には、ひととおりのお茶を教えました。私のあとが継げるほどの腕になりましたが、お茶で生涯をつらぬけとはいいたくありません。苦勞するのがいいのです。そして、どうにも生きようがなくなつて、せめてお茶だけにわずかなぐさめを見出すというようになれば、それからひと筋にお茶に打ちこんでいいのですからね」

「姪御さんの無事平穩を期待してないような口吻ですね」

と、江見延江が皮肉った。

「これほどの子が、平穩無事に終つては、見物としては面白くないでしょう」

「いけない伯母さまね」

鶴岡礼子が、鈴鹿に同情したが、それもことばの上だけだったやうである。女も八十歳となると、化けてくるものらしい。ものごとの解釈が奔放となり、直情的となり、それでいて見物の立場であり、無責任であり、また刺激をもとめるあたりは、

女であることをやめているかのようにである。

「あなたがあんなひとを好きになったのは、高校三年のときだったでしょう」

鈴鹿がぎくりとして、魚住泰子の方に顔をあげた。魚住は、お茶を正客の前に据えた。

「ところが相手は、あなたを子供だと思っていた。目がなかったのですね。そこで運命の道が分れた」

「これじゃまるで鈴鹿さんをいじめているような工合ですよ。おめでたい報告だったのに」しかし、とがめるふうもなく、江見延江は笑っていた。

「結婚前に好きなひとがあった。そのことはこっそりと心の奥にしまいこんで、べつひとと結婚をした。その生活に満足ができないとわかったとき、かの女は昔のひとを思い出す。思い出したところで、どうなるものでもないけど、そのひとを思っているときだけが、せめてものの心のなぐさめとなる……」

と、江見延江がいった。

「だけど、結婚生活が可もなく不可もなしの程度だったら、昔のひとのことなんか、きれいさっぱりとわすれてしまえますよ。ふっと思い出して、そんな自分が気まり悪いくらい……」

鶴岡礼子のことばには、実感がこもっていた。

「子供ができて、日常生活に追いまわされるようになると、ロマンチックな思い出なんか、どっかへふっとんでしまいます」と、魚住泰子が確信をもっている。「とくに結婚生活が仕合わせでなくとも、平凡にくらしていけたら、昔のことはわすれて

しまいますよ」

「十年後に偶然に再会した。相手の変わりようにびっくりした。そして、かの女はにが笑いだした。こんな男にいままでひそかな、切ない思いを抱きつづけていたのかと、がっかりした。その瞬間から、昔の男のおもかげはさっぱりと女の胸から消えた」

鶴岡礼子のそんな経験に対して、

「それは、男の側からいえることです。十五年ぶりに再会したら、ぶくぶくと中年肥りのかの女に変わっていた……。かの女のためなら、この世界ととりかえてもよいと思いつめていたのに、十五年後のかの女が、むざんに夢を破壊したということもあるでしょうね」

「人間は、無常ですよ」

と、魚住泰子がいった。鈴鹿はにこにこして、三老女の経験をきいていた。鈴鹿の心の奥では、すでに整理がついているふうであった。

「無常なくせに、執着心がはげしくて、ふかいんですよ」と、

鶴岡礼子がつけ加えた。

「そして、時と場合によっては、何をしかずかわかりません。あっとおどろくような、信じられないようなことをやってのけますからね。人間で、よくよく危険きわまる存在です」

作法にしたがい、静かにお茶をたのしみながら、三人の老女は、人間というものの正体を衝いていた。三人はいちいち、鈴鹿の顔に話しかけた。人間は無常であり、執着心がつよく、信頼のできない危険な存在であることを、若い鈴鹿にふきこみたがっているようであった。八十歳の経験者のことばは、心して

きかなければならぬだろうが、人間が無常であることも、執着のふかいことも、危険きわまる存在であることも、鈴鹿の実感には遠かった。

「運転手さんは、若い娘が辛抱よく、老人のお守りをしていると、感心してながめていますよ」と、鶴岡礼子が車の方をながめやった。

「私はまた」と、江見延江がつやつやした、小さい顔を据えるようにした。「若い娘が、白昼の松林の中で、三人の安達ヶ原の鬼婆になぶりものにされているんじゃないかと見られていると……」

「いくらかその気味もございますよ」

魚住泰子がみとめた。あとは、屈託のない笑い声だった。

「それでいうわけではないけど、鈴鹿さん、そこらを散歩してきてもいいですよ」

解放されるのをのぞんでいたわけではなかったが、鈴鹿は魚住泰子のすすめにしたがった。白大島がゆらりと動いた。柄が大きいので、動作が緩慢にみえた。松のあいだを次第にはなれていく鈴鹿を、三人の老女が見送った。

「私のあとを、あの子にゆずります」

「泰子さんには、そのほかに身寄りがなかったですね」

「お茶の方も、あの子に継いでもらいます。この土地も一度あの子に見せておいてやりたかったのです」

江見延江が、首を傾けた。

「明るくて、きれいで、若々しくて、人生の仕合わせを確実に

約束されているようだけど、鈴鹿さんの表情のどこかに淋しいものがありますね。私は人相見ではないけれど、案外すらすらといかないんじゃないかしら」

「あの子の母親は、後妻でした。あの子が生まれました。先妻の息子ががんばってました。小さい内ならともかく、年ごろになって、母親を失いましたから、あれでもなかなか感じやすくなってるんです。結婚しても、無事にはすまないような気がしてならないのです。そうでなければ、うれしんですけどね」

「好きなひとがあったというのは、ほんとうですか」

刈上げの老女が訊いた。

「あの子はしばらく会社づとめをしてました。勤めなくともよかったのですが、母親の亡くなった長谷部家にいるのが、やりきれなかったのでしょうか。それもあります。高校時代の思慕の延長だったんですよ、その会社につとめたのは」

「すると、その会社に好きなひとがいたわけですね」

「いいときに、あの子が結婚してくれます。私は、ほっとしました。つとめるようになってから、その相手はあの子の値打に気がつきました。ふたりのあいだがどこまで進展していたか、私は知りません。でも、おたがいの気持が次第に寄り添ってきていたのは、たしかです。何しろ相手には、奥さんがありますからね。そういうことを考えて、あの子は結婚する気になったものとみてます。あの子は、馬鹿ではありませんからね」

そのとき鈴鹿は、松の幹にかかるく右手をあてがいて、向うむきに立っていた。ひそかな悲しみを抱いて嫁いでいくひとの姿勢だった。